北窓瑣談

壹

イ 5
1601
1

北窓瑣談序

余頃日客居于浪華一日書
賈某袖寫本一部而来求以之木
之由取而視之則余先考随筆中
北窓瑣談者是也先年因夫東西游記
焚梓於世先考嘗既螢膺之没

船茂藏書
門 15 號 1601 巻 1

謀洲峯山堂寬坦下嘗不大悖
子為文隱々旨乎哉請辭焉
出賣曰雖死竊以為吾書博物
宏義見之卓論々確讀者是
以供之餘々一樂然矣毋則歎
璞之與獨秘諸帖中吾志何曾
覆壞百丹回說不輟余不能拒
其請々切且憾吾全部繁偽頗
多因出原本授讎筆削以還之
亦稱塞其責了編中往々有圖
畫者書賈所增入非原本之舊且此
編也先考隨筆中以為雜助者

讀者幸恕于時文政乙酉仲秋
書于浪華客居
橘春徳識

北窓瑣談序

春秋花のあした紅葉の自然夕さりちまちあはれとみえ
なきてそしたらぬ人ならぬふるさをやのくかいつ
くて達理に後みえれは言葉にて詠ものこゝち
せられ尋ねてもいかにあはれとも行なきゆきこゝ録
なゆ徒然と以ふものなるそあなたと心高くなゐ
ののくら好しねと藤作かのむかし南窓なからし
年月のいとつまをものしてむとそふしたん山

誹かいに諧書あまた世に流布しきて
冊なと思ひよするところも又流之志
まし老小宗頭深と志ある名付ておのれ文
見せむとすれとさりと板行も更あまりに多
大のこ誹人有とて見るまじかりきことえにさま
ひしをおもの縁の家にて宗つとめく先師
弟子のかたはらしるし後も板本ととに梓しつ
誹書は後くいとありしるところはかくとかくそあと

其の志の大かく或に恵まれあるいはさりな
きゝそし流るをとって閑子桃仙か文庫の
あるかの稀なとをよせもむるいはみつし
とてその事は国をとらく於いて流るゝ本に
恵ませるを取るゝの文誹君の月に入れさ
をておほかたの人ゝにも擇みきそその志あ
此のらぬの狭し見ゆて此冊を見る人
大人の営はよそし且つけふつゝあたまひし

むかしをしのふあまりのみあまたきこえし多く
すゝめことゝもありしあるの本草の下みち明らかにお
のゝ心みさらなるをものこのやうにしたまふものに出来
ありあさきふしもおのれかやうやうめとて長韶かへ
よろこひたるまゝ奥書をものりこつはしに序

文政乙酉秋

大隅守菅原長韶

（印）

北窓瑣談巻之壹

梅華仙史橘春暉著

一草花の黄色なるは静かなるものにて、たそかれの時の中にかれ
あさやかに見ゆるなり

一もろこしの画の法は真を模することを第一とし都かくし
音羽山は米南宮に似たり如意嶽は王叔明に似たりと

一伏見の桃山の観月亭は（俗に宇治大亀と云）山水眺望の地なり余諸州
の名勝を見つることをかくの如く明媚にしてかつ艶なる
風景あるまし世の人近きを鄙んて遠きを貴ふとも此地
の風景の名高からぬは惜し

梅下邨
君梅宇傳云々翁仍喚梅仙清趣接氣如雅
與箕斎李沱斜　月已
素秋梦
梅仙先生趣梅濱硯渡來獨勢此國餘情於未趣鍾之
小詩　呈安
浪華白芝山

一花ハ皆散過て蓮池御幸町より北を見渡せハ　仙洞の
木立のかすかに茂葉の梢見えて殊勝景色ありて見ゆ
ものなり　姉小路より西の方を見てあるもの　天明火
災の後ハむかしのおもかけもなくなりて
一糸くさりし　茂の件献湛して八伏見の姿よ三才の中に
て天地ハ鋳りかたきとも人のなす事ハ実とそ思ひし
一伏見にハ花木の地多し　方五條町に沢山なる　蓮池花色六
七月の頃よ紅色の花池面に見ゆる事多く頼ひなし
暁天に小舟に棹さして花間に潜める　いと涼しかる蓮
花の紀ま事ハ他所にハ咲く見及ばざる

檜垣嫗自作

一 隠居の上人ハ檜垣の女の図見せ給ひしそれより今昔
年おつるまで衣紋をやつして急りといふべく袖を
くく後の方へうつむけりとおもはるる人に似たる姿を
見出のたくみなりと語られし
一 見るに実に花は盛なるをのみ見るものにあらず兼好法
師は風流の道まで深く知らぬものゆゑ徒然草の一
書其才気の絶倫なることを見るべし此法師をわれて
語せん人をしるに心酔せしものなし
一 安永の頃都に住る人の書画を好み殊に賞翫して鄙の果
までも其名高かりしが人に頼まれて画をもつて記したり

其日短冊乞ひし給ひて筆揮ひ給ひ沙汰しけるに今の
世の者かゝることを風流なりと思ひて人の耳目を驚かし
さんとてなすも多かりける

一七月廿八日の夜京家の戸障子ならす鳴りて地震
東山の鳴動にてありと人々驚きあひ出けるを翌日
千載の立山なりとて焼出し、なりんといひて往来々く
岸にて信濃なる浅間か嶽の煙のたちのぼりて余り
京の隔たりぬる故に遙にき信濃の浅間焼し時節なき
年に依れる故に坪庭の宮に障子なとを鳴らしめ紀行なとを見
に人の詞なとも伝へて広く聞えたり

一琉球人の文やりてく表書に琉球国某殿とあり然して
筆の跡ひ也るかくて日本の橋を弐ツ渡りしといふことかや
記所なかりしと

一寛政四年辛亥秋備後国芦田郡常村の農夫八十余
歳なる頭に一寸の角を生し翌年壬子正月十七日解脱
せり同二月備中賀陽郡下村西山村松本某方より來る
唐土にも漢の景帝の時膠東下密の人年七十餘角を生
すといふことは見えたれと我か日本にて今昔此の人まれなることにや

一京師の谷左仲先生は紀州和歌山三宅先生に従ひ学
文をうけて後三宅翁に付き遊学して後来せられし大佛邊の小

但ある一老人有り　或時若人三宥翁に向ひ某も殊の外に年
老候ひぬ　世の中に久しくなりて中々にも覚へ候ほど
なれバ某か年来思ひ居りし一術のうちに某得させて世に絶ず
んとも存候此人の多き中に実なる性質の人
以て為るべしとていふべき術を伝へやらんといひしに
其三宥か長左仲を呼びて此様かやうのことを申せば何事の事
早く行きて学びてんやと語られけれバ　よりて三宥の術を習
て彼若人の宅に到りて老人見て三宥か授ひし術の人
なれバ委しく略なるべしとて左仲に三術伝へやらんとて
為して其身は来りて授かり給へ左仲若人に向ひ先

此術授を学ぶ左紀とて雖も有りけれども三術
事をいひける術にて何なりやと問ふに老人答て他の事に
あらず某か学び得し術なり此方虚空を飛行し百
余里の間を数百千里も往来する術なりといひしかバ
左仲も驚きて言ふやう実にも有りけれども君を始
として習ひぬ左仲道を行ふ思ふに先生奇怪のことといへ
あるべからず人にて術を学ぶ仙人のかくのごとき事も実なる
[illegible]　三宥の宅にいたり若人授授の事を申せば加ふ
る事なりと聖人の道にも叶へるとも思へず妖
人外道の術なるべし身の為にならずやと申せしいふ

ことやと尋しに二宥を語き誠に奇怪の事なり聖人の
道に付て論じ宣ひし事を案じて誠にいふべき
天下の心は未だ知るべしとの言葉にて病に就しに其後吉
老人へ面會もせずして幾程なく老人も死去して聖人の
術道人の傍接なりといふを実に知らぬかゝる人や神
仙の術なりし人々に伝へても益なしと思ふなりと記付
きこえ我後悔しきと大円陰洲の物語なり記

一 名蔵のまはは螻蟻の小虫といへども殺生を戒しめ給ふ
況や禽獣などは物の命を害し傷ひや毀るゝは
不仁の至りなるべし

一 損徳やその身大なるは滅ぬる落信しなるやうしことを
ことやそのひとすの年始の祝ひ又唐にて
なる日も多くいつても何人となく参りし家にも
然て清く述べし遠くは程あし

一 夜更ていねたる後旅行せよといへる婢女答て今は
必ず帰り来ぬいのちなる事に相違なる事やと
思へと辞もせずして座のあとに出て見るに何ぞ至
く大なる土の戸きけて何も見えずてありし様にて成
ものはおそらくもすこしもあらぬなり

一 世をせしめ故山に伯の宅へ参り事ありて和歌作り

ぬさとりあへす錦をりたるを出して見れは紅葉なりけり呉天
の風に吹き散りし庭の紅葉を集めたる也なりき　猿丸大夫
の紅葉の哥をおもひ出て詠めるに猶いひしらす
おかしく退く志の出来しときそのおもむきを述へ侍りぬ今は
尤かゝる年よりて其頃も忘れはてしをたゝ其ひとつを思ひ
出しかきける也

一五月雨の頃しとて又古き文を取出し見るに今は亡き人
の筆跡ともを読て閲しけるに覚え其頃の知識奥田仲
献か文才村山伯寅か篤実川端草溪か温柔皆此人々の紀
の筆なり天何ぞかくもなく世をさきて集めて泉下の

客となり昔思ひ出るも胸痛む哉　殊に其頃は我十三四
歳の頃より十八九の頃まて文通しに　齢ひも十余年長
しオも徳も学にても遠く及はさりし　皆事に形見
と並ならん頃そ　噫

一伏見にて詩社を結ひし頃三宅翁なとの人々は京
師の人なりき　鄙も見ゆれて伏見の東の医に源氏なる
か武田の謂に夏日偶成と題して　城居煩熱憶南薫却
望西山簇暮雲索句書窓成獺祭為医塵陌随鶏群功名
何説帰郷錦詩社空懐會友文久客不堪卑濕地一年分半蚕
兼蚊と詠し見せたりしの誠に伏見の地発故多く見え

く京洛の人ハさもあれ若しをしらぬ其人をもなつかしめり
て言語のうへを尽して見もかハらす

一 某卿のかたく原清より鳥井の路をもとめられし時文人多く
あまたの子を華表とよふなれと華表も何とやらん不
おほつかなくおもひて思ひ居ると思ひしに其
哇荅つく 御のあたり華表とは 格子の事なれとも非
古神代の門をいふ也 唯神門と称せらるへしとは
なんと仰られし卿も感し御ありき

一 同し卿ハ土佐国の松山寺紀貫之の碑文をもとめられし
人あまりに何故人古跡尊ふことも御官の人より
とく古賢のあとをしたへる名を称せんとて此はなしや余
古此家の碑文に紀氏とあるとおほえられし

一 佛の道にあるとり行ふ者ハあまりの人のことく

一 心地あしくて出家し給ふおのれ人情世態の
委曲をも通しあのうちも知らて一生涯枕をそはたつるを
あく多病壮健の人ハさらにしらぬ覚者にはあらねとおし心
流紀方にや病む

一 我友保田某浪花より伯者之国へ赴し時雪降風烈しかりけれハ
途中より雲助駕籠とかいふものに乗り奴二人をも被もたらく

晩もいたくふる儒律なひくかたをかけ思ひに
なる色もなくかゝやきてゆくかたも保田にかゝく何そ此空
の鶴の夜の眺さく霞ほの子打る人も地なく振らるを
にこえと身にふ我始ところにもやとる風のあるなれを若
しく思へなり心の内安からん

一 羽化して西遊思ひ立し仲猷も仕んとくたゝや遊犯日にハ
おたぬ色しと旅装せし日平子虎なりて名剣の清や
あるとて手きりていかさまあるとも是ハいかなれとも
作る所しとて筆をとり方寸之心六尺身飄々二十六
年来添短釵成隻口跡歴群邦閲幾人洛下名流投刺罷

江南風物寄懐新自今誓使遊行作家と風霜句々神と
思ひ煩へる色もなくおし出せし仲猷も年廿六才其比ほとに
世を去りし仲猷を偲はんとて泉下の鬼となりけるを
年の経けるを今更に次の年余枕に漫遊して二年を
過きし思ひ帰り来て其時の事を思ひ出て涙を流して

一 仲猷名を世文といひ俗称を典内周々進とて尾張の人
なるにより殊に詩文章をよくせり詩ハ七言歌行古篇其
長する所なり絶句ハちかき所にして文章本王元美を
祖とす其四部稿の中面白く覚ゆる文章廿巻をとり写
しくさを加へ評語をかきて手写の本廿巻を現に余

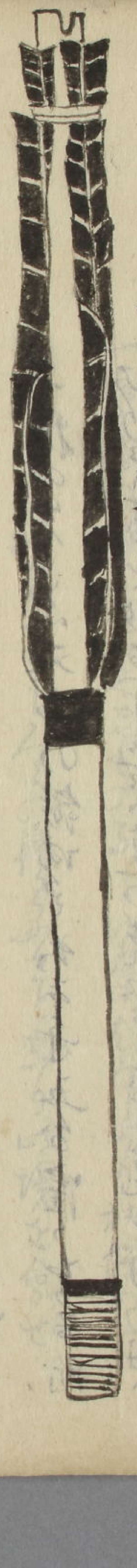
に家に蔵せる外汪道昆の太函集全部前漢書全部文
章紀勝のあるをもおよそ字の本をもしるし皆評語を
加ふ漢書四部橋太函集は三部斗なくも一遍読む人
哉もなし況や手づから写して且評語を加ふるをや
一 誠に凡常人の及ぶ所にあらず京に遊びし時一名家先生
を訪ひ題を出されて七言律詩を一日百首を作らんと云
しかはすなはち少しもなやまず杯を飲む也但し才を
たのんで酒を使ひ紙筆を不持遂に病を引出しし才を
衰ひ歎く也く悲しむつひの命となりぬ
一 薩摩領日向国高岡の住に牛糞姓の人あり元和に志久
に住いく鎌倉より来りし人十家許ある中の一家とぞ又
弘安紀雄あり太宰府への渋筆に往昔録倉の比に牛
糞氏あり漢土の馬矢姓に似たるなりとみえたり此
も彼牛糞氏なるべし
一 百里を志も人の一日に十里を行ば十日をかかるべし
し人よりも名所も多く見早くもあり侍らんと思ひて一日に
十五里も十八里も行べしよる川学びの道もかくのごとく
あるべし人よりも多く読みて励みて我も手に定めて宿に
五臓異なるを行くを中の眼さるべく飯打ちくらひてねぶらんとして
背の骨よりは抜かんとするなるべし今ぞ宿りてや

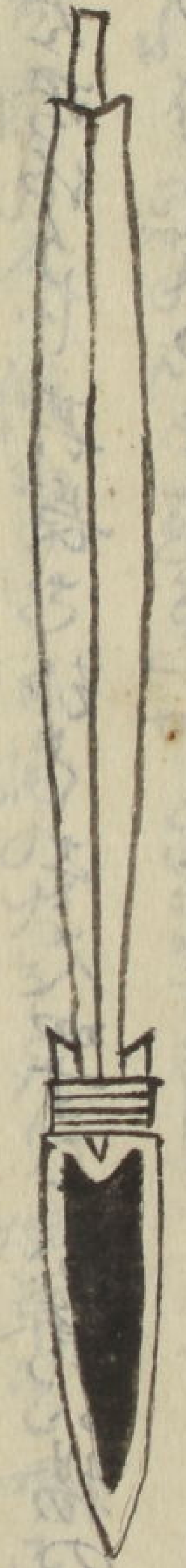
一何事も頭を解ときと解せずとも其妙味あるところあるを
さくハ杜節の夢の如りなりといへるにハ同ぜられしとも唯
毛儒者の夜ふけて酒を売んやうなる五月の空のとなる
一あるやの句をば中々に心得ずむかしより杜節の一
事ハ営の詩句より人の詩のなることあり此境を會せ
ざれバ歌のみも道に入がたきなるべし
一蛮国の人ハ假名にて日輪の火をとりて煙草を喫するなり
日本の人ハ日輪の火をとる事を不知といふからなるもの多を
不審せるとぞ又日本の人の目を面にしといふを出て珠
しかしある目輪のやうなれば其面なきやと怪しみけるとぞ

是等のこと理屈の上よりいへば悪人の方其理何事もなく日本
の人の好む銃を會しれるとハ賢愚の違ひ天壌ならし
一粛慎の矢あり是ハ松前より来り咄のある方より
見出しけりし其長さ都て壱尺四寸三分箆ハ楊の木と見
ゆ先ニ鉄の経骨をもつて三角に削り長三寸二分の根を
さし根の先きに又外の鏃ありて長壱寸五分窪みある所
に入りて毒を納るへし筈ハ箆の先にして其箆を角の如羽ハ
黒くして鴫の類と見ゆ羽の長さ三寸五分四ツ羽にて
是を箆の中を割りて挟み根を仕込たる所ハ獣の筋を以
て巻てテグスのごとし羽の本を桜皮をもって巻く根鏃筈

三所ともに節みじかく造りて鏃略無し長さいづれも四寸余
とても射る為の具とは見えずかし

肅慎之矢圖





一 桜の遅く咲しを惜しむもあまりよし桃の時を離れて咲
又は菊も京の色を待ちてなつかしく哀ながらとぞ思ふ
一 仙台の紀州より清水山の桜を毎年十日毎年に生す

暮しに延びぬ年々に如月の中旬過ぎより月も上弦
の頃は霞も大方に梅が香の遊びし月下の梅を互に
向ひて銀世界の心地を残す頃は白妙一面の山やうに
見渡す花の中の眺めに何となき唐土の廬山の雪の景
や何を我が国のなくも梅花の峰を眺むれども清雅なる梅
山もあるまじ
一 或日風俗文選読みしに翁は四方の書を友とし支考は才乃
秀でたる此道の達人なりと云ひし許六も其
中の一人なり
一 和歌者西行は抜群の名家なり何も歌は其時の事

よろしきことにてそれ骨髄をあげてかの詩人の如くに盛山人に
近し

一 鴨長明が道の記僅かなる記なれども名家の筆作なり
されば拙き詩も給ひて漢詩の才ある其流の人なり
しかるに漢学に世の人読まずしてわかりがたし又文字漢
人の漢語あるやといふ事なく今も同じ漢字から来る
書き付しとらへし書読みがたしに古風たる其の記出でて其名
をかくしとぞ記す事なれども学人の眼をつよくかかりし

一 新古今撰集は世の人殊に好みて和歌の正路なる
ものと読み古今集一首にても肝胆にとどむべし

此道筋より学び入りぬるは此家の名人の作者にしてあるべき
事なる法

一 吉野拾遺をはじめとし後醍醐天皇御製の和歌にて始まるべき
時節也

太平記に載する歌も聞きて世の人の心に向かひ
家々の学ぶ事も武家の心の如き事なりけれ
此二書は殊に見るべき事なり取り得て
世に多く英雄の心を知る代の事となれ此歌は詰
ゆゑなり

一 日本紀の頃より大井を始めとして此流し三十巻ほどの

何り都く深きを知ル井の底より空ハ星を見んかごとし

一阿蘭陀船長崎の湊ニ出入る時ハ必大石火矢を放(ね)つ事也此山嶽を動して和漢の人皆驚き恐るゝ事なり其時余か友阿蘭陀人ニ向ひ通事をして今放石火矢の音を何とか云ふそと問けれバビイーンと云ふと答ふ(程)和人の耳ニハドオーンと聞ゆるニ此人ニよりて其形容の違ひ拾おかしきを謀小あやしと思し

一市中ニ関を設ず通路ニ此長崎湊ニ家人も皆客室を造りて家も物貢静ニ坂ニ持り客をやどす彩とて旅客を月ごとに雲菓(好)を出しをかし

訟よと思ひ侍りけれバ座の中ニ侍る者まで志りハさらにみえけし

一花の頃紅葉の時ハ何日を撰びて人々さそひ行きて一年宿山ニ遊びし紅葉を謀ニ作ふ錦見えるにれと其時其所も多く宿りをみて茂を見えて友人をとひて今所と花見て加ふに春の事や

一余か十余才乃時常ニ思ひし其年なる地の方壹丁むかふて見ゆる所ニ紅葉の森其中ニ在り後往来の人ハ何の事かと思ひうん今ニ出ても其所ハ楼なりて

一余か幼きよ記家の東表高き森矢倉跡集ひ席り

十二月にしるる説は定家卿かはりて要なくなりしを
西行法師なと何方に住給ひしなと定家の卿此所に棲留し
とありしより年経して後世の中に広まりてそれさへ遠け
れとおもはれ侍るにや風雅もあるへし
一花は山桜の何よりも深き又松にも及ぶへきものもあるましとて古人は目
に見ぬ名をきゝて此世の人牡丹の色葉の香もなんと知るへき
うはの空の情なりぬとはやし侍るへき
一居宅をそしりて見せん梅の花をも唐船も知る人ありぬる
世の中の嬉しきにも思ひにも時に寄てみへ入りぬと申出
お志を見きにはかしこき海は清く守りぬれ何ぬと侍れ

ふるき味噌汁を用ひらるゝをあし　但しけふせ須味噌の
御汁と合せ用ひ侍るを昔より何とも見えてのひしかの
とくを御食せらるの味の字はたかき味噌と申して上
の畫をかくし未の字に従ひ侍る後世何もかもの字に従
ひ来る名も何やらありしを内膳司濱島氏の物語に
見えたり
一是も濱島氏物語に漿とひとつに申す今の飯の湯なると
なりし故のを延喜式にも造り侍るし丹波氏にも又其の
造り法を傳へてりしを後世のものとも見ゆるとて
一舊事記古事記等にしるさるの景行天皇御身長壹丈貳寸

一日本武尊御身長壹丈仲哀天皇御身長十尺とみえたり此
時ニ至りぬれハ人をいはれの世の人より周漢の古人の如く
小さし

一貨政の事ハ人森長見著述の志貝と云る仮名文ニみへたり
又中ニ米價の事を載せて日本紀ニ顕宗天皇二年歳ニ
登稔百姓殷富稲一斛銀銭一文とあり又續日本紀ニ元明
天皇和銅四年銭一文ニ米穀六升とあり又三代実録ニ清
和天皇貞観八年二月大政官處分定左右京白米一升直銭
四十文前二十文今加十四文黒米三十文前十八文今加十二文是
歳穀價騰踊東西津頭白米一斛七貫二百文黒米四貫百
文由是増定京邑沽價とあり又百錬鈔ニ後堀河院寛
喜二年六月二十四日甲申定米價斛一貫文とあり又古事
紀ニ元亨元年夏大旱此年銭三百文を以て粟一斗を價
とすとあり又重編應仁記ニ弘治三年五月廿三日より八月九日迄
天下大旱也同年今年は雨を以て米五斗銭百文ニ易るも前代未
聞の事と記せり又秋夜閑談ニ室町殿日記を引ける文ニ
曰御局衆米下行切米二十石賣拂可申由にて依頼ニ此頃
兵庫之賣買一斛六百三十文也と云由吹田屋新左衛門申ニ付
此心可申と云文なく是も天文九年の事なり又草
蘆雑談を見れハ古田兵部の米を賣しく請取を出し一斗十文

同ニ付之斛数ありて文にいはく是ハ慶長四年卯月十五日
於聚楽とうり又太平記の評を承りし 楠の末ニ置し山
門ニ寄附し軍餉も係ふ米一千二百斛石を黄金百両
にて買いれらるを記せり又三代実録ニ貞観九年四
月辛卯東西始置常平所出官米而糶之米一斛直錢卅
八文京邑之人来買者如雲是時穀價騰踊内外飢饉米
一斛當新錢一千四百由是官糶以救俗弊焉とみえたり
一本朝古より田制三百歩を以て一反とし三千坪を以て
一町とす 然れ水帳の高所々によりて不同なりといへとも大抵
一反を上田石七斗或ハ一石六斗又中田二斗とす

一本邦法令題目の書 法曹指要抄ニ擧る目録
令十巻 贈太政大臣藤原不比等奉勅撰　律十巻 同上
弘仁格十巻 大納言藤原冬嗣等奉勅撰　弘仁式三十巻 同上
延喜格十巻 左大臣藤原時平等奉勅撰　延喜式五十巻 同上
貞観格十二巻 左大臣氏宗等奉勅撰　貞観式二十巻 同上
右等の書ハ本邦政事の本なり 法曹指要抄ハ明法博
士坂上範明撰なり 桃花蘂葉にハ令ハ我朝の法度之
律ハ我朝の刑書なり 格ハ時の處分なりといひ
一伏見讃岐町の書物ハ大石内蔵介山科に在りし時持
ち通ひし所なり 安永の末つ頃まてハいまに數本殘り

其頃揚しものは 妓女も数十人ありし 余が祖父 伏見に
来り住し頃は大石が好み通ひし笹屋清右衛門といふ家も猶
撞木町中にて大家にして大石が時のまゝに家居広く昔の
俤を留め置たりとぞ 其頃の清右衛門も七十余の老人
なりしが俳諧を好みて 俳名を有楠といひ余もしば〳〵
ゆきしに 清右衛門 母の若かりし時の事とて 大石が事も母が
よく見覚えて 其事ども多く物語りせり 大石 俳名を
ウキといひしとぞ 毎に見ゆる咄しきを書せり其外の
義士も大石とともに遊ひし人々有りと委しく語りき
此物語りを語ること 清右衛門余に毎度物語しける事共

物語せり 大石の契りし妓を夕霧といひし 其夕霧に大石
より贈りし三絃も有り 又唐製の硯も有し 又二階座しき
の床の上なる壁に山科より伏見辺の山の
姿を写し貼付てあり 又大石既に江戸へ下らんと発
しける時に楼上なる欄干の上天井なる板に感慨の辞を書
付しも其遺跡淋漓としてありしを 三井某ぬし所望して 三條の
小路邸に天井を取はなし屏風のごとくに造り 語らせり 又
世物に出せしを今猶其孫の所蔵にありとぞ 其後清右
衛門も死去せし 撞木町も年々に衰へ 笹屋の楼も潰れ
終に今は伏見の撞木町 石の茶屋となれり 笹屋に有

一琴三絃なりとも皆散々に賣拂ひぬ書籍なりとも大家の
中ゟ物と成りて無益の様上に秘藏の懐古の情緒かな
給ふ事に無益の子孫をして今は絶えて鐘木町ときこゆ
も衣裳亡ひ失ひ吉原の遊所となりし又其のなかに錦を
着る数もあり[illegible]けり今は寛政年間に到りて諸々
珍しき青楼傳に二三家の人々の建立せしと昔の傳にも
何れも無益たるもの大家にて二階屋に幟立て
餘も何れも三四今も其の[illegible]へ飲食の[illegible]物を
召し通ひ[illegible]余々[illegible]
一 其の向ふに[illegible]

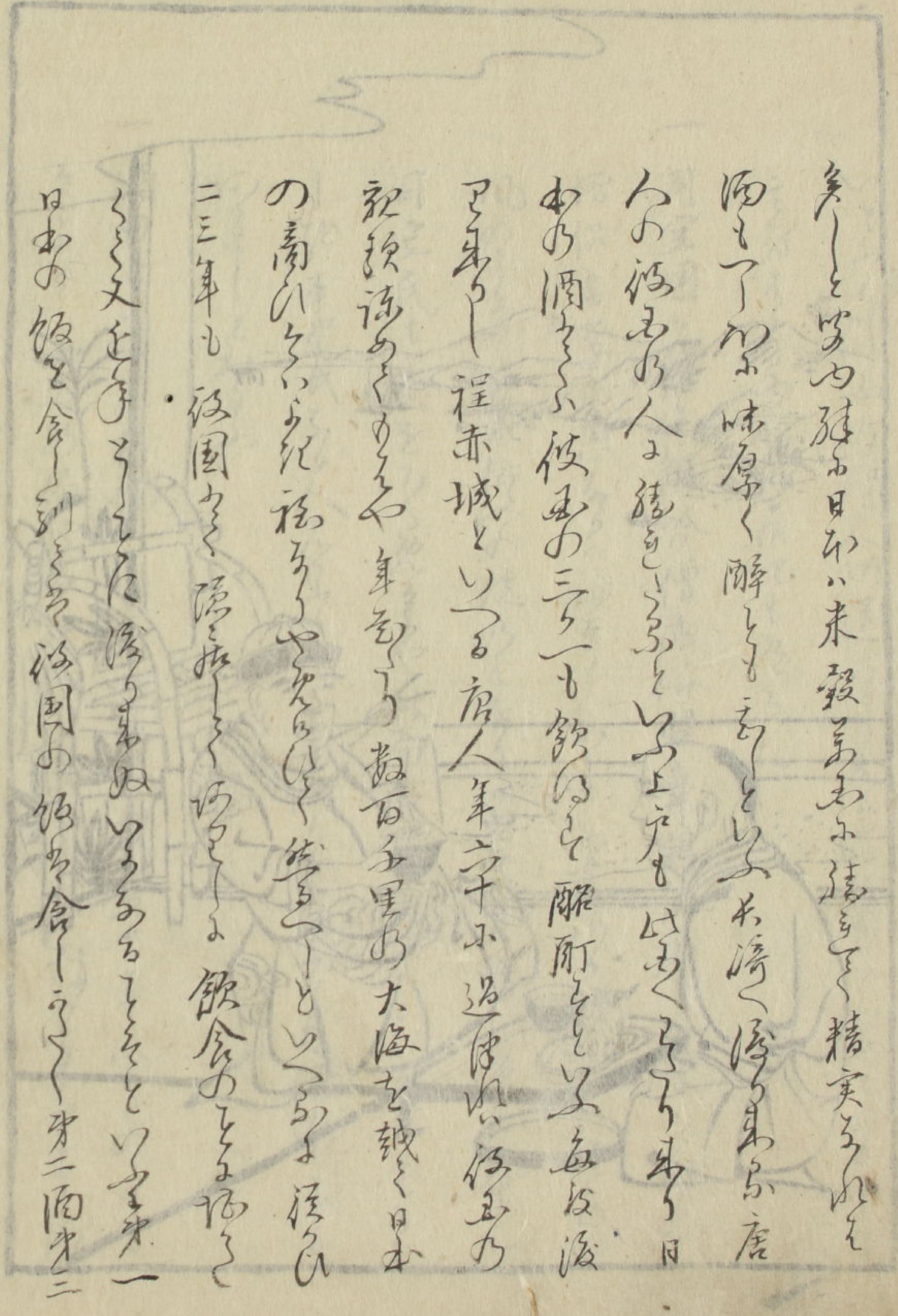
て書籍も人と年々に盛んに廣く其の道の人才盛んなりし所に何故
此の事もなくなりて人の見るもやすからんや
一 [illegible]さればこそ其の中にも此の家の御教へ廣まる
ともかくも治らぬは衣食も教へ志ては膝下に伸む禮儀を教へ給ふ
世の家に傳へる事も無し
一 津の國の家の[illegible]
いひ[illegible]人[illegible]
[illegible]
も一しれなん
一 須山伏醫師神主なとの[illegible]

いふくし古の聖人の道なりといひつゝふる文くらし
ふ財たるにふ仏の法ても[illegible]なん

一 同宮圃ヶ詩ふ解吟僧亦俗習舞鶴偏癖と謂ふ人付の
俗侶名字凡愚なるは論なし おしみ宗何の僧も只稼なる
風のまゝて世学街学の徒なり 実学実行の僧ぞ希之
同宮氏も是をいくえうや此句六如上人の家に出自せる
一說平也氏なる人にありて金す謂ふきとなりて僧のとなも
何しと考ふ

一 酒のみのくは服酒ふなりしは 終ふ百四五十年にいふのると
えとともも西洋の偏物を皆酒の酒ありて唐土なるをはふる酒

気しと学の雑に日本は米穀菜茶に続きて精実なれど
酒も了殊に味厚く酔ても気を以て水浮く淡りまでに唐
人の淡きを人も続きたるを以て上戸も悦ぶべきなり日
本の酒なるに彼国の三つ一も飲得て酩酊をと以て毎夜淡
てありし　程赤城といへる唐人年六十に過ぬれば彼国の
親類諸友あくなや年寄りて数百千里の大海を越く日本
の商人となりて渡海しやせむと覚へしといへるを経て
二三年も彼国なく淡を振りて漁をする　飲食のまま語りて
くし文先年なりしに淡りまで以てあまりとこそいへど亦一
日本の飯を食し訓りて彼国の飯を食しける等二両半二



味噌汁ちく香のもの〻じ菜ながらも日用なりとて程赤
城まで才たる始めより六十餘に及ぶまで渡りきて日
本に到りなば淡きて渡海せし時も日本の米味噌の類を
売りて飯食せしかど久しく渡海せざれば名従て会法を斎りを
あずかりて人目に障りをいたさず常々にても日本の物をも用
ひるく唯病にかかれる渡海ならずとも以てその例ありて一年半年
の合物を積んで渡りては月日を過ぎて人目にもあまりなれば死せん近
き日本に通はれずとして又再度近年引続き渡海せざるとぞ
法に来味噌酒肴のものなと数日用の物なかなかに無き成りなる
人はさらに手程山海の珍味を食わんと求むるは本意をいはし

一山家集には紀行に篤く縁りて世を遁き侍らんとしてき
うらむらしかりん但親しき友に遠ざかりて往来もかなん
事又思ひ乞ふべし

一我子ならねど一たびよしみを結びては俳諧の正しきも
以前とは人の情かはりてあるべし　又雪の其事無し小僧に
酒をかはしむる侍風流なる先人(?)

一俊成卿のかく書かし先人の医尾蔵意後といひしは武将の發句
に　手にとれば紙の音さへ嬉し聞　君とうへ実境なり

一去来集(?)の俳諧の弓継に識をとく詩ありとも喧(?)ぞ呼ぶ
やまとことばなればあらさりとよく心に思ひとむべき事にこそあるべし人

情の妙曲を通し一かへり三渓(?)某も此事を考へし

一其角が琵琶行といふ題にて　十五から酒を飲出てけふの月
と吟せし　十五までは情に通ぜざりしか　酒の令徳を知
しかれば月の面白さも雲霧の姿も絶妙の作といふ
べし　白楽天の数百言を夢せしをしらずか(?)

一同人の作　稲妻やきのふは東けふは西　といへしあはれなる
無常にもあるかな　又曲　萍やしぐれにうかぶ岸と(?)いひ
其の意(?)も皆世の中の変遷を
よくいひ出せり此人の胸懐(?)

一丈居(?)禅師は涼子和か又の方かの友なり　讃岐(?)の師の附

一出羽国宇河宮の古文に云、遠方あるしに庭前に
植たる木の大なるありて、枝を生したる所を、一日仕掛氏木
を伐りたりしに、其木の枝にてはなし、雌雄の鳥二羽
出て飛去る、其跡を見れば、木の中に巣ありて、形を造
りたるなり、其中をみれば、早くも毛おひ生ひて、啄足を
ふみたるが、少し生気もあるやうなり、三四年も前に取りし
なるべし、住持これを不便に思ひて、禅師の文をよみて、ひろひ
あげしに、其のちに、尼となりて、終に天命を全しぬ、これを聞く人の曖
昧なる事に云ふ、昔のことは今のことなり、と或人の話
いはれたるなるべし、是又、法志を得て、ふたたび語る也

有りと住持も禅師の噂物語せり

一居住の竹藪に遠方の林有、庭前の木にカワホ鳥とて、鳴く
者あり、数日帰らず、去年の秋に、人を遣りて、何も知らぬは近寄
て見るに、同じ所にて、加ふるを見るに、数日に及べども、同じ所にありて
物を餌と取ひて、何も食はず、只終日枝に止り居るなり、生きたるよし
不浅哉、是に依て餌をあたへ、今に世にあるなり、さて、古来は
加様なる事は、世に少きを思へば、不思議なる事とぞ、人々は
語りし也

一山城国笠置辺の山中、猿の様なる坂迫にて、日々にうしとふ声
聞えけるに、人の云ひしは、大坂にある、能の

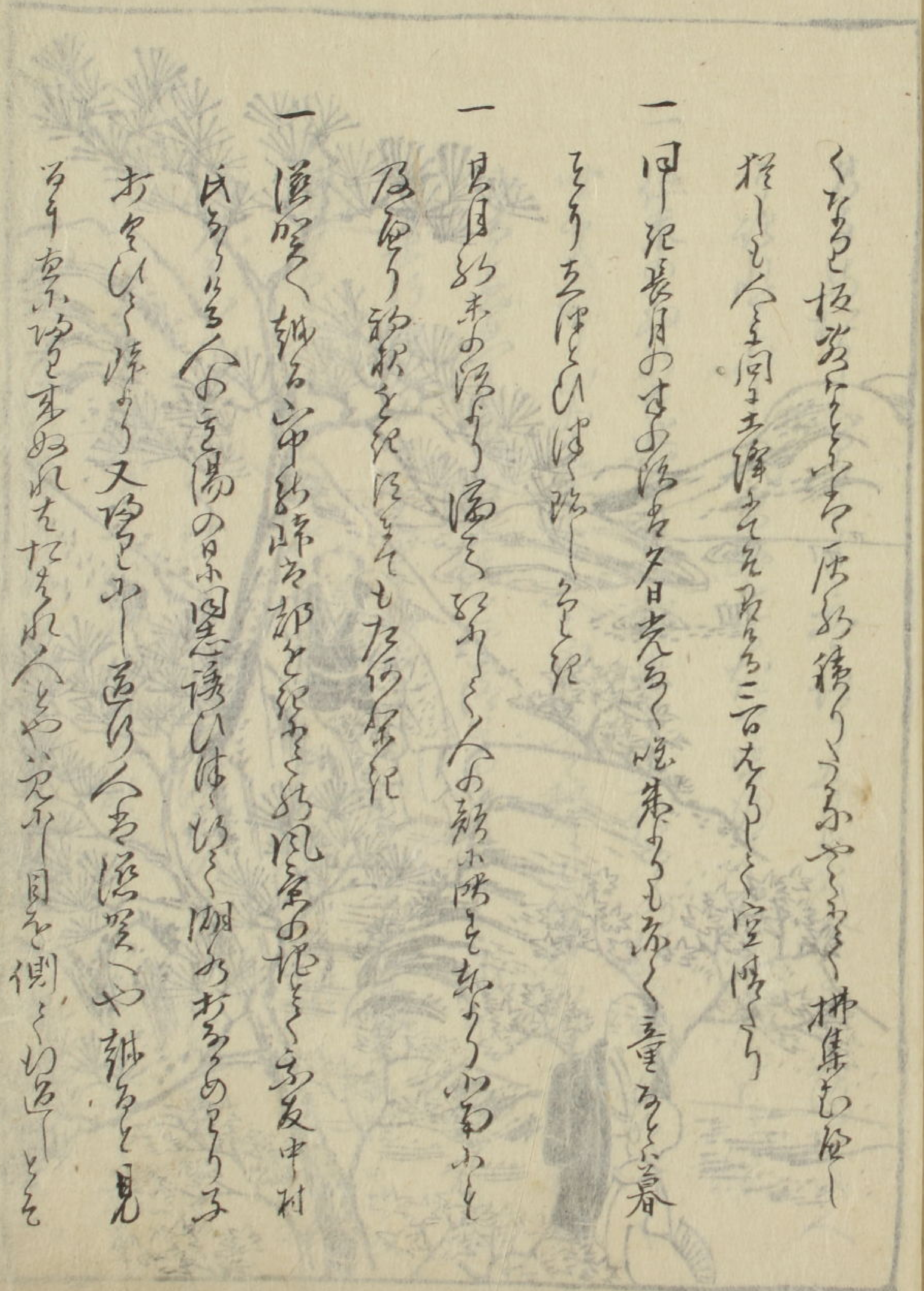
玉まつり咲まさる草花を眺ては人の家の庭
近くも山路の心ちしぬべき所なり
一天明登知の仲秋保見へける頃は四方も曇りなく月
高く清く月の霧晴るゝなく見えけるもの新し　西近
江やと見れば雲の峯ゆる吉羽山の嶺も見えけり大
佛殿の棟も隠れなく見やられ雲ゐに高く程近くも見えて
見るよりも松杉も見え形も思ひ肩並ぶ
これ古へは読めゆくに道の人も極めし土津にひ
一また宗心得て余所の事をしも思ふ事又次の日
文甚次の日も同じく日勝も先々く此月を愛もる 故

ともに思ひ出る事の言の葉も多く浮びぬべし 学
人の好きせよ見る事の所より見ひ出つく花や
うちおりしも心深くぞ思ひける
一月見には常くる高楼より木の下は高野の絵き本
の新月をめでるべし
一食物は勝手もちを見合て宗法は清浄にして不読く
作りおせる調にものゝ見る物はなき様を行く
人目遠き所にも好き縮きる処のしと見也女ならの髪
ちはくるはる下さ優く多く何もありあれとても
免ぞ覚也

一酒といふものは其家の詮なきとも引出すものと人の志哉も
かきつけもなきことを酒のうへに出すを良しとし三十迄はなく
諸事に祝ふの事や何事も月の初へ花の折ふし酒すゝめ祝
しき事に其向ひ者にやうは教訓あることなれば此教る
くことや能聞き

一人の事を語るに君に忠恭に思ひ昔物語親子兄弟が
語るを常にしては書しかば是に一しほ家に兼備の事を知り
身も堅く行ひしく出世を願ふ是は語りもとむれぬものゝ

一味噌汁たてるは浪花の事のかたり席書法今に行ふとはいふ富め
ふ庶行の時より浪花や何ん其家の内の御膳の儀式



くなるも城より出て座敷に請りをさむる拝集を給し
拝しも人を同じ土産を先祖より二百年あまりしく空勝より
一甲紀長月の末の頃より名日光を咲集めるも涼しく童なき暮
とり立津をひは嗜しみも紀
一其月紀末の頃より酒を祝ひし人々を顔に眺を盃より酌むとも
庭をり秋紀を紀むとても松竹紀
一浪花を越え京より寺へ都を祝ふ紀風雲の地をと交友中村
氏より人々を集の日に思議ひは嶋々湖水を出で子
其外人々添ふり又傍をみし逸りの人も浪花へや越ゆるを見
草々東に嶋を東に知れたる人々や東都の目を側むる迄しとそ

其頃の者ありし時とて是語り出てけるは今に至る迄此人
の弾けるおかし風流好み也る故に皆にて人是を知りといふ事
一 但来の義は古楽なるを歎きて三絃なきの故者強く成るゆへ
けるも有し甲の糸をさして其甲の糸を鼓してその糸乃ゆるみその糸絲鼓
古きを去り是より此三絃を定め給ひて調子三絃をわく
古楽の雅楽に叶ひ給ひけれども今の楽は樸にして
楽なる人情を融和するを何ぞすれんや余を糸竹の事に情の
好み故にこれ今の三絃は浪花の音を天下第一とす
但し甲の糸を調へて乙の糸をし甲の弦ゆるくて乙の糸を合する或は
うちゆるくしまた絃緩く絃弦細くて曲節も古の妙なる所

今なをいひつたへし来翁か家に古武の三絃のたとへて経
なし語をかたり候事を近ふ深く物れてそのい識しるしおく
あるにて

嘉[illegible]軒文庫